『狭衣物語』飛鳥井女君の二度の死

丸山　薫代

一、問題の所在

『狭衣物語』巻一は、飛鳥井女君の入水に向かって巻の最後に極度に緊張感を高め、巻二は、「底の水（藻）屑」等の表現の多用により、飛鳥井女君の入水を読者に強く印象づける。しかし、飛鳥井女君は実は入水で死んではいなかった。巻二の巻末は、飛鳥井女君がどうやら生きているらしい、という新しい事実の提示で次巻への期待を煽る。しかし、生存の判明した飛鳥井女君は、巻三の冒頭すぐに亡くなってしまうのである。

飛鳥井女君は、なぜ二度も死ななければならないのか。飛鳥井女君の入水未遂については、『源氏物語』の浮舟との類似が指摘されるが[1]、浮舟と違って飛鳥井女君はその後死んでしまう。浮舟との相違にも注意すべきであろう。

もちろん、飛鳥井女君は浮舟と違って妊娠しており、一度助かったことによって狭衣の娘を出産できるのであった。ではなぜ、出産後に結局死ななければならなかったのか。本稿は、このような不審を生む飛鳥井女君の「二度の死」について論じる。

本稿第二節では、『狭衣物語』巻二で飛鳥井女君の入水による死が、「底の水屑」「底の藻屑」といった表現によって強く印象づけられていくことを確認する。第三節では、『源氏物語』蜻蛉巻を中心に、浮舟の入水（未遂）後の表現を見ていくことで、飛鳥井女君の死を印象づける表現の特徴を探る。第四節、第五節では、『狭衣物語』巻三以降の、飛鳥井女君の出産後の死を見、なぜ救出されたにも関わらず

結局死ななければならなかったのかを考える。

二、入水のイメージ――「底の水屑」「底の藻屑」

狭衣に別れを告げることのできないまま、狭衣の乳母子・道成の妻として筑紫下向に同道させられた飛鳥井女君は、道成の持つ狭衣の扇により、道成が狭衣の親しい臣下であることを知り、絶望して死を求める[2]。巻一は、彼女が虫明の瀬戸で入水しようと海を覗きつつ怯えている場面で終わる。

飛鳥井女君は後になって、入水の手前で救出されたことが明らかになる（巻三②五一～五二頁）。しかし、彼女の入水のイメージは、巻二以降の物語の本文の中で強く印象づけられている[3]。

飛鳥井女君の入水を印象づける表現として重要なのは、「底の水屑」「底の藻屑」を中心とする固定的な表現である[4]。新全集の本文では「底の水屑」が四例、「底の藻屑」が四例であるが、諸本によって差異がある。

1硯をせがいに取り出でつつ、この扇に物書かんとするに、目も涙にくれ、手もわななかるれど、

早き瀬の底の水屑になりにきと扇の風よ吹きも伝へよ

とも言ひ果てず、人のけはひのすれば、落ち入りなんとて、海の底をのぞく。（巻一①一五二～一五三頁）

飛鳥井女君の入水に対しての辞世の歌である。道成が持っていた狭衣の扇を手に、自身の死を狭衣に伝えてほしいと、扇の風に託す。飛鳥井女君は、海に身を投げた後の自分自身を、「早き瀬の底の水屑」、つまり早い流れによってばらばらになる、海の底のごみとしてイメージしている。

巻二に入ると、狭衣は二つの段階を踏んで飛鳥井女君の入水を知る。第一段階として、巻二冒頭、道成の弟の道季から不確かな情報として知らされ、第二段階として、道成自身の口から知らされる。次の引用部は第一段階に属している。

2道季が思ひよりしことの後、いとど底の藻屑までもたづねまほしき御心絶えざるべし。

思ひやる心ぞいとど惑ひぬる海山とだに知らぬ別れは

思ひ出づるは、なかなかにこよなくめざましかりける道芝の露の名残なりけんかし。（巻二①一九二頁）

海に身を投げたという道成の妻が、飛鳥井女君と同一人物かもしれない、という道成の推測（巻二①一五九頁）を受け、狭衣は、「底の藻屑までも」彼女を探しに行きたい、と思う。

ただし、ここでは「海山とだに知らぬ別れ」ともあるように不確定要素が残り、「いとど底の藻屑までも」という表現は、狭衣が彼女を探索したい範囲の広さを誇張的に表現するものともなっている。飛鳥井女君イコール「底の藻屑」とは言い切れない。

それに対し、次の場面は、狭衣が道成から飛鳥井女君の入水を聞かされた場面、つまり第二段階に属する。

3この扇は見知りたりけるなめり、あはれ、いかばかり思ひけんと思しやらるる涙の水脈になりぬべし。

唐泊底の藻屑も流れしを瀬々の岩間もたづねてしがな

（中略）

あさりする海人ともがなやわたつ海の底の玉藻もかづき見るべく　（巻二①二五三～二五四頁）

ここでは、狭衣は1の歌の書き付けられた扇を見ており、ここではその表現に基づいて「底の藻屑」と詠んでいる。入水は確定しており、2のような大げさな表現としてではなく、具体的に、「底の藻屑」としての飛鳥井女君がイメージされていよう。

また、「わたつ海の底の玉藻」も、同様に、海に沈んだ飛鳥井女君の遺骸を表している。この表現は、『大和物語』百五十段、帝の召しがないのを嘆いて猿沢の池に飛び込んだ采女を悲しんで人麻呂が詠んだ、「わぎもこがねくたれ髪を猿沢の池の玉藻と見るぞかなしき」（三八四頁）の歌を踏まえており[5]、その引用によって、「水屑」「藻屑」に見られたある種の露骨さを緩和しているようにも受け取れる。

1の歌に対する反応としての3に対し、4以降は、「底の水（藻）屑」表現が、飛鳥井女君の呼称として用いられるようになっていく。

4ひとかた（＝女二宮）こそは、かく思ひの外になりたまはめ、かの底の藻屑をだにあらましかば、あなづらはしき私ものにて常に見あつかひ、心を慰めましものを…　（巻二①二五九～二六〇頁）

狭衣は女二宮の出家、飛鳥井女君の入水と、関わった女君たちの喪失を嘆く。ここでは、「かの底の藻屑」と、飛鳥井女君の呼称として「底の藻屑」表現が使用されていることに、注意したい[6]。

5「わきかへり氷の下にむせびつつさもわびさする吉野川かな

上はつれなく」など口ずさみつつ、からうじて漲りわたるに、かの底の水屑も思し出でられて、ただかばかりの深さだに思ひ入りがたげなるを、いかばかり思ひ

わびてかなど、…　（巻二①二九六～二九七頁）

これは巻二末の粉河詣の場面であるが、ここでも「かの底の水屑」とあり、呼称として用いられている。この直前で狭衣は妹背山を義理の「兄妹」である自身と源氏宮によそえており、そこでは吉野川は二人の仲を裂くものであった。凍って渡ることもできない吉野川の、少し漲る川の水が、狭衣を飛鳥井女君の追憶へと誘う、その話題の転換に、「かの底の水屑」という表現が用いられたことになる。4の「かの底の藻屑」が、女二宮との対比・並列の中で用いられたのと同様である。

6…「さらば、この底の水屑のゆかりなりけり」といみじうあはれにて　（巻二①三〇二頁）

粉河で狭衣は一人の僧と出会い、彼との対話から、彼が飛鳥井女君の兄であることを知る。「底の水屑」は呼称として安定して使われている。

この僧との対面により、飛鳥井女君の生存が判明し、その後、彼女は病死する。よって、これより後には、「底の水屑」「底の藻屑」が飛鳥井女君の呼称として用いられることはない。後の二つの用例は、回想的なものである。

7かの「底の藻屑」と書きつけたりし扇見つけたまへりしかば、尽き果てぬと思されし涙も、残りある心地してぞおぼえけるや。（巻三②五四頁）

飛鳥井女君の最期の住処であった常盤に出向いた狭衣は、彼女の火葬の煙が立ち上ったであろう「むなしき空」（巻三②五四頁）や「念仏の声々」（同）に、涙を流す。「底の藻屑」の歌の書かれた扇を見た時と、常盤を訪れた今と、狭衣は二度、飛鳥井女君の死に向き合っていることになる。

8常盤に帰りたまひて、心地少し落ち居るさまに、思い続くること多く、口惜しかりける身の宿世、いと悲し、我とは驚かしたてまつるべきやうもなく、人は、底の水屑とこそは聞きないたまはめ、今は、世にあるものともおぼえず、忘れたまひぬらんかしと、思ひけるほどにや、

忘れずは端山繁山分け分けで水の下にや思ひ入るらん　（巻四②三九八頁）

右は、飛鳥井女君が常盤で書いていた絵日記の描写である。入水間際に兄に助けられ、常盤に移った飛鳥井女君は、狭衣が自身を「底の水屑」と思っているだろう、と思っていたというのである。

このように、7、8の例は巻三、四の例ではあるが、回想的であり、表現のきっかけとなる1の例を除き、「底の水屑」「底の藻屑」表現が巻二に集中していたことがわかる。

さらに、特に4、5、6においては、呼称としての使用が認められた。

飛鳥井女君の呼称としては、他に「道芝の露」が認められる。巻二ではその二系統の呼称がせめぎ合っており、巻四では「道芝の露」が安定して用いられる。最終的に「底の水（藻）屑」が使われなくなることは当然として、一時的にそれが呼称となったことが重要であろう。(7)

次節では、飛鳥井女君と同じく入水未遂を犯した『源氏物語』の浮舟をめぐる表現と比較することで、これらの表現の特徴をより明確にしていく。

三、浮舟の「入水」をめぐる言説との比較

『狭衣物語』巻一の終わりで飛鳥井女君が今にも入水しようとし、巻二でその「死」が狭衣に受け止められる、という関係は、『源氏物語』浮舟巻の終わりで浮舟が入水しようとし、蜻蛉巻で浮舟の失踪が入水として薫らによって受け止められるという関係に近い。そこで、本節では、『源氏物語』蜻蛉巻で浮舟の入水がどのように語られるかを見ることで、前節で見たような『狭衣物語』巻二における飛鳥井女君の入水を印象づける表現の特異性を明らかにしたい。

『源氏物語』蜻蛉巻は、浮舟の姿が見えないことから幕を開ける。しかし乳母は最初は「むなしき骸」さえないことを、鬼に盗まれたかのように捉えている（蜻蛉⑥二〇五～二〇六頁）。母も「鬼や食ひつらん、狐めくものやとりもて去ぬらん」（同二〇九頁）と思っているが、侍従らが、「これは入水である」と判断を下す。

侍従などこそ、日ごろの御気色思ひ出で、「身を失ひてばや」など泣き入りたまひしをりをりのありさま、書きおきたまへる文をも見るに、「亡き影に」と書きすさびたまへるものの、硯の下にありけるを見つけて、川の方を見やりつつ、響きののしる水の音を聞くにも疎ましく悲しと思ひつつ……（蜻蛉⑥二〇九～二一〇頁）

事情を聞かされた浮舟の母は、浮舟が入水したことを認識する。

さば、このいと荒ましと思ふ川に流れ亡せたまひにけりと思ふに、いとど我も落ち入りぬべき心地して、「おはしましにけむ方を尋ねて、骸をだに、はかばかしくをさめむ」とのたまへど、「さらに何のかひはべらじ。行く方も知らぬ大海の原にこそおはしましにけめ。さるものから、人の言ひ伝へんことはいと聞きにくし」と聞こゆれば……（蜻蛉⑥二一一頁）

浮舟巻で宇治川の荒々しさが強調されており、ここで浮舟の入水が印象づけられる。宇治川で入水したと目される浮舟だが、ここではすでに海に流されただろうとも言っており、海の底の水屑となったとされる飛鳥井女君とも共通する。

その後、宇治で浮舟の死因を入水と知らされた薫は、「いみじううき水の契りかなと、この川の疎ましう思さるることといと深し」（蜻蛉⑥二三五頁）と宇治川への嫌悪感を強め、「水の音の聞こゆるかぎりは心のみ騒ぎて、骸をだに尋ねず、あさましくてもやみぬるかな、いかなるさまにて、いづれの底のうつせにまじりにけむなど、やる方なく思す」（蜻蛉⑥二三七～二三八頁）と語られる。

蜻蛉巻の次の手習巻では、紀伊守の回想として、宇治で悲しみにひたる薫の姿が描かれる。

「あやしく、やうのものと、かしこにてしも亡せたまひけること。昨日も、いと不便にはべりしかな。川近き所にて、水をのぞきたまひて、いみじう泣きたまひき。上にのぼりたまひて、柱に書きつけたまひし、

見し人は影もとまらぬ水の上に落ちそふ涙いとどせきあへず

となむはべりし。言にあらはしてのたまふことは少なけれど、ただ、気色には、いとあはれなる御さまになむ見えたまひし。…」（手習⑥三五八～三五九頁）

「疎まし」「あさまし」など、宇治川や入水への嫌悪感と罪悪感の目立った蜻蛉巻の薫とは違い、ここで語られる薫は、川の水の中に消えていったであろう浮舟を純粋に哀悼している。紀伊守から見た薫であり、薫の内面が紀伊守に見えないからこそ、「哀悼する人」としての理想的な姿が描かれていると言えよう。

こうした浮舟の入水をめぐる言説を並べた上で、飛鳥井女君の入水をめぐるそれと比較してみると、「底の水屑（藻屑）」という表現の特異性が際立ってくる。浮舟の場合、「骸をだに」と亡骸さえ存在せず探せないことはしばしば言及されるものの、その亡骸を美化しようとはしていない。わずかに、「行く方も知らぬ大海の原にこそおはしましにけめ」や「いづれの底のうつせにまじりにけむ」といった表現が、海や川底の亡骸を形象化しているにすぎない。

これと比べれば、「底の水屑（藻屑）」という表現が繰り返して用いられることが、いかに水底の亡骸を美化しつつ強調するか、明らかであろう。

四、飛鳥井女君の二度目の死

第二節で確認したように、『狭衣物語』巻二において、飛鳥井女君の死は、「底の水屑」「底の藻屑」の表現によって、海の底に沈む遺骸の美化されたイメージとともに、印象づけられた。しかし、巻二は、女君生存の可能性の期待感とともに巻を閉じる。

だが、巻三で女君の生存が語られると思いきや、女君はすぐに亡くなってしまう。女君の兄の僧（＝「阿私仙」）は女君の危篤の報告を受けて姿を消しており、彼が帰ってこないことから、女君の死亡の可能性が強まる。

Aさてもあはれなりし阿私仙をさへ惑はしたまひてし口惜しさも、思ひやる方なきままには、「帰りてやある」と、粉河に人々たびたび遣はせど、「無し」とのみ言ひつつ帰り参れば、妹背のさは亡くなりにけるこそはと思すに、なかなかなる稲淵の滝なり。

ありなしの魂の行方も惑はさで夢にも見ばやありし幻

池の玉藻と見なしたまひけん、帝の御心もなかなか目の前に言ふかひなくて、忘れ草も繁りけむ、これはさまざま夢うつつとも定めがたう、御心のみ動かしたまふ。げにいかなりける昔の契りにかと、思し知らる。さはありし暁その夕べにや消え果てにけんと思せば、誰ともなけれど、そのほどより、むつましう思す僧どもに言ひつけたまひて、またまたの日までの弔ひをぞ、いみじう忍びてしたまひける。いかなるにても、この忍ぶ草のありなしを聞くわざもがなと、御心に離るる折もなし。

（巻三②二二～二三頁）

前節の引用3で飛鳥井女君の形象として用いられた『大和物語』の猿沢の池伝説は、ここでは狭衣と女君との関係とは異なるものとして思い起こされる。目の前の池に飛び込んだものとして采女を追悼できた『大和物語』の帝と比べ、狭衣はどう悲しんでよいのかわからない、というのであった。つまり、3の時点では可能だった、「わたつ海の底の玉藻」「池の玉藻」としての飛鳥井女君追悼が、巻三に至ると否定されることになる。これと共に、巻二で多用された「底の水屑」「底の藻屑」の表現も、ほとんど姿を消すのであった。

そして、ここからは飛鳥井女君よりも、その遺児＝「忍ぶ草」に焦点が当てられることとなる。

狭衣は今姫君の母代から飛鳥井女君が常盤の尼のもとで子を産んだこと、出家して亡くなったことを知らされ（巻

三②五一～五二頁）、常盤に向かう。

B世にありと聞くとも、今はその人をとかく思ひ尋ねんは、いとねじけがましきを、ひたすらに亡くなりにけんは、心安くめやすきに、ただかの忍ぶ草の、露のかごとにて、世に出でさすらはんが、心憂ければ……

（巻三②五三頁）

巻二の終わりで女君の生存を知ったときも狭衣は「あさましう心やすくて」（巻二①三〇四頁）と感じており、生存を喜ぶ気持ちがあったはずだが、ここでは、むしろ亡くなっていてよかった、と思っている。女君の死を悲しむ気持ちはそれはそれとして、道成に盗み出され、入水未遂まで犯した女君は、狭衣の妻妾として生きていては具合が悪いのである。

これは、『源氏物語』蜻蛉巻に、薫が浮舟と匂宮との関係を確信し、「ながらへましかば、ただなるよりは、わがためにをこなることも出で来なまし」（蜻蛉⑥二一七頁）――もし浮舟が生きながらえていたら、私にとって不都合な事態になっていたかもしれない、と思って「焦がるる胸もすこしさむる心地」（同）を抱く場面があるが、女君の死に対するある種の冷ややかさという点で、共通するだろう。そして、薫がこの後浮舟の生存を知らされるのとは違って、飛鳥井女君の死は確定している。

この後、「忍ぶ草」＝飛鳥井姫君を探そうとすることが、一品の宮との濡れ衣による結婚へと物語を動かしていくことになる。さらに、狭衣の即位後は、飛鳥井姫君は一品の宮となる（巻四②三八〇頁）。一方、飛鳥井女君も、巻四の終わりの方で厚く追悼されることになる（巻四②三九三～四〇三頁）。しかし、「女君と狭衣の関係は入水以後なんら進展はなかったわけである」[8]とも言われるように、女君が入水で亡くなっていた場合と、物語の実際に語られる亡くなり方とでは、狭衣と女君との関係に限定すれば、特に違いは見られない。唯一異なるのは、もし入水で亡くなっていたら飛鳥井姫君は誕生していなかったが、入水未遂から救出されて後に亡くなったことで、飛鳥井姫君が誕生したという一点のみである。

巻二の終わりで飛鳥井女君生存の可能性を示して読者の関心を惹きつけておきながら、巻三冒頭ですぐにその死を明らかにするというのは、あまりにあっけない。なぜそのような仕方で、二度目の死を描かなければならなかったのか。

巻一における入水（未遂）は、それが狭衣と飛鳥井女君との恋物語のクライマックスとなるという点で、ぜひとも

描かれる必要があっただろう。そしてその効果を生かすためには、巻二で彼女の死が十分に嘆かれる必要があった。では、二度目の死はどうか。

この飛鳥井女君の二度目の死について、「なぜ結局死ぬのに、入水未遂の後、一度は救出されなければならなかったのか」という問いを立てるのであれば、その答えは、一つ目には飛鳥井姫君を出産する必要があったこと、二つ目には、入水による死であっては、仏教的な意味で救われえないということが挙げられよう。

一つ目について言えば、田村良平氏は、飛鳥井姫君が狭衣と一品の宮とを結びつけることが、狭衣を帝位に導いた要素の一つであり、彼女は皇女として狭衣の帝位を保証するのだ、と述べる。[9] この姫君を狭衣の即位と直接結びつけられるかはともかく、この物語において、出家した女二宮が産んだ若宮と、亡くなった飛鳥井女君が残した姫君、つまり悲恋の結果として誕生した子どもたちが狭衣の栄華を支える、という構造を見てとることはできる。最終的には子も恋も兼ね備えた式部卿宮の姫君（藤壺中宮）が登場することにはなるけれども、巻二から巻三にかけて、源氏の宮以外の女性との関係が悲恋に終わりつつ、子は誕生していく、という型が、物語を動かす力となっている。

では、「なぜ一度は救われたのに、結局は死ななければならなかったのか」という問いを立てるならば、どのように答えられるだろうか。この点については、次節で考察したい。

五、浮舟と飛鳥井女君との違い

第一節でも触れたように、『狭衣物語』の飛鳥井女君は、入水未遂という点で、『源氏物語』の浮舟の型を引き継ぐと理解されることが多い。しかしながら、前節で確認したように、入水未遂の後、物語の最後まで生きている浮舟と、結局は死んでしまう飛鳥井女君とでは、その差異も大きいのである。

手習巻の救出後の浮舟は、「「あはれ」の世界の相対化」[10]とも言われるように、男君中心の世界の論理から離れ、自分自身の救いの道を、手習と出家とを通して手探りながら目指していく。その一方で浮舟が生存していたことは、薫のためには動揺を引き起こすこととなる。

蜻蛉巻で薫は浮舟の死を聞かされた当初、次のように思っていた。

かかることの筋につけて、いみじうもの思ふべき宿世なりけり、さま異に心ざしたりし身の、思ひの外に、

かく、例の人にてながらふるを、仏なども憎しと見たまふにや、人の心を起こさせむとて、仏のしたまふ方便は、慈悲をも隠して、かやうにこそはあなれ、と思ひつづけたまひつつ、行ひをのみしたまふ。

（蜻蛉⑥二一六頁）

ここでは、「浮舟の死」は、「女性関係で物思いをしなければならない薫の宿世」の一貫として捉えられる。さらにそれは、仏が薫を出家させようとする方便なのだ、とも捉えられる。浮舟の死が、浮舟の人生の問題としてではなく、薫の人生の問題として捉えられていることになる。

同じようなことは、大君の死についても言える。総角巻、大君の死の場面には、地の文とも薫の心内語ともつかぬ形で、「世の中をことさらに厭ひ離れねとすすめたまふ仏などの、いとかくいみじきものは思はせたまふにやあらむ」（総角⑤三一八頁）とあった。しかし死後の大君の美しさは、むしろ薫をこの世に執着させることにもなる。いずれにせよ、大君の死は薫にとっては彼女をますます理想化することにつながり、大君がその死によって薫の人生で大きな意味を持つことは、そもそも大君自身が望んだことでもあったと思われる。

女君に死なれることが主人公たる資格である[11]ならば、大君はまさしく、薫を主人公にする女君であった。しかしながら、その時、その死んだ女君や彼女の死は、主人公たる男君の物語に回収されることになる。夕顔にせよ紫の上にせよ、その死が光源氏によって悼まれることで、男主人公に対するヒロインの位置に甘んじるのである。重要な女君であるからこそその死が描かれることが、その女君の自立性を失わせることは、物語のジレンマである。

そのような中、紫の上は、残される光源氏を「あはれ」と眺めることである種の主体性、独自性を発揮し、大君は自分から進んで男君に哀惜されることを志向した。「かばかりの隙あるをもいとうれしと思ひきこえたまへる御気色を見たまふも心苦しく、つひにいかに思し騒がんと思ふに、あはれなれば」（御法④五〇四～五〇五頁）と、自分の死後の光源氏の嘆きを想像しながら亡くなる紫の上や、病気を見舞う薫に「日ごろ、訪れたまはざりつれば、おぼつかなくて過ぎはべりぬべきにやと口惜しくこそはべりつれ」（総角⑤三一八頁）と恨み言を述べる大君は、相手の記憶に残りながら死んでいくことに意味を見出していた。しかしそれは結局、男君の物語に回収されることになってしまう。

浮舟の意義は、まさにこの点にある。最初、薫の「宿世」、薫のための仏の「方便」と捉えられた浮舟の死は、自殺で

あったことがわかることで、そうした捉えを難しくしていく。それでもなお、薫は「ただかの一つゆかりをぞ思ひ出でたまひける。あやしうつらかりける契りどもを」（蜻蛉⑥二七五頁）というように、浮舟の死を、大君の死や、中の君を手に入れられなかったことなどと一纏めにして、八の宮の娘たちとの悲恋、という形で捉えようとする。そうした中で、浮舟が生きていたこと、出家して生きていこうとすることは、八の宮の娘たちとの悲恋、という形で納得しようとする薫中心の物語に反発する、浮舟自身の物語である。

これに対し、飛鳥井女君は、その死によって、男君に哀悼される女君という、男君中心的な物語の論理に、屈することになるのではないか。

そもそも、巻一の巻末が飛鳥井女君――狭衣だけを愛している女性のやむにやまれぬ入水というクライマックスに向かっている時点で、この物語の女君は、男性中心的な「あはれ」の中にいると捉えることができる。そして、飛鳥井女君の死を本当に取り消してしまうことは、巻一巻末や巻二の感動を取り消してしまうことにもなる。第二節で確認した、「底の水屑」「底の藻屑」という表現による、海の中にある女君の遺骸のイメージも、飛鳥井女君の二度目の死を後押しする。

つまり、狭衣の悲恋という物語の構造が、飛鳥井女君の死を必要としており、それに従って二度目の死が描かれてしまう点で、飛鳥井女君は『源氏物語』の浮舟と比べて、批評性の低い女君であるということが言えるだろう。

【注】

（1）久下裕利氏は「入水譚」（同『物語の廻廊――『源氏物語』からの挑発』新典社、二〇〇〇）において、飛鳥井女君の入水を「未遂で終わるという浮舟踏襲型」と位置づける。

（2）「などて、たださし離れたる賤の男にてだにあらで、親しく、よろづ聞き合せたまふべき、ゆかりにしもありけん、遠きほどまで行き着きて、このありさまを見扱はれぬ前に、ただいかにしても死ぬるわざもがなと思へば」（巻一①一四一頁）

（3）先行研究は、飛鳥井女君登場後の早い段階から、飛鳥井女君に対し入水に繋がる「水」のイメージが付与されていたことを指摘している。三角洋一「飛鳥井物語小考」（同『王朝物語の展開』若草書房、二〇〇〇）、田村良平「『狭衣物語』における飛鳥井母子の位相」（王朝物語研究会編『狭衣物語の視界』新典社、一九九四）、三村友希「飛鳥井の女君「渡

らなむ水増さりなば」をめぐって――水・涙表現の〈文〉をたどる」（井上眞弓他編『狭衣物語　文の空間』翰林書房、二〇一四）など。しかしここでは、そうした議論には立ち入らない。

（4）野村倫子「飛鳥井をめぐる「底」表現――流離と水の多重性――」（同『『源氏物語』宇治十帖の継承と展開』和泉書院、二〇一一）、野村倫子「『狭衣物語』飛鳥井遺詠の異文表現――「底の水屑」と「底の藻屑」から紡がれる世界」（注三『狭衣物語　文の空間』）。

（5）三村氏注三論文

（6）久下裕利「『狭衣物語』の人物呼称について」（同『狭衣物語の人物と方法』新典社、一九九三）

（7）「底の水屑」「底の藻屑」という言葉の表現性については、注四野村氏論文が詳しく論じている。

（8）片岡利博「飛鳥井女君の物語について」（同『物語文学の本文と構造』和泉書院、一九九七）

（9）田村氏注三論文

（10）原岡文子「「あはれ」の世界の相対化と浮舟の物語」（同『源氏物語の人物と表現　その両義的展開』翰林書房、二〇〇三）

（11）今西祐一郎「哀傷と死――「死」の叙法――」（同『源氏物語覚書』岩波書店、一九九八）

※『狭衣物語』『源氏物語』『大和物語』の引用は、新編日本古典文学全集により、巻数・頁数を示す。